

ファーレ立川の設置作品「古典的交信機器、伝声管」について

牛島 達治

私と、「音」の関係が始まったのは、1984年頃の石の音を聴く作品によって始まりました。私にとって「音」というのは、発する事より聴く事の方が相性が良い様に思います。そして、伝声管は、聴く事も発する事も出来るものです。最初に伝声管を利用したプランを考えたのは、ある公園の計画のときなのですが、そのプランを交えて説明します。

その公園は、日本の東北地方の小さな町に位置し、山の裾と平野が入りあった谷状の地形の場所で計画されたものです。その公園の全体を設計された原氏の建築を越えた思考体系と整合性を持ってプロジェクトを進めて行くために、一つのキーワードとして「足もとからの宇宙」という考え方を導入する事にしました。「足もとからの宇宙」という事は、文字通り「日常の」とか「自然体の」という意味であり、「何か特別なもの」ではない所からの視点で見つめ、問うときに生まれる内的な宇宙のことです。そして、いくつものプランが出来ましたが、このプロジェクト自体は、実現のめどがたたないまま今に至っています。しかし、その時拡張された思考領域は、資産としてこれからも活用して行けるとても有意義なものとして私の中にあります。

「伝声管」は、この公園計画の中で考えられたプロジェクトのうちの一つで、体験することによって、「何か」を発見する可能性を啓発するための装置でした。それは、実際に肉声を使って考えられない程の距離を隔てたコミュニケーションを可能にする構造を持った装置です。この自然の環境に位置する装置群の中で「伝声管」の持つ意味は、「非常識な程の距離」と「肉声」そして、「物理的な構造」によって成り立つことが出来るものと考えました。

一方ファーレ立川における「古典的な交信機器 伝声管」は、未来的な街に位置し、おそらくさまざまな情報のライン、エネルギーのためのラインが張り巡らされている。これらのネットワークは、高い生産性をこの街にもたらせる可能性とともに地下に埋設されています。ここは、都市であるという厳然とした事実が、公園計画の時の場所性との間にあります。この街に参加する人たちは、勤めに来る人たちや近隣の生活者が、殆どであるはずですが、そういう人たち、要するに目的を持って移動をする人たちにとって路上にあるものは、駐車中の車も看板も芸術も大した違いはないのではないのでしょうか。この様な環境の中で、強い主張を持ったものを置く事は、車や看板と意味なく対決することと同じで、私は、避けなければならない方法だと思いました。私は、何処にでもある物、例えば石ころのような存在の仕方が、私の作ろうとする作品にふさわしいのではないかと思います。それは、道行く人のかたわらで、歩道に静にたたくように存在していたり、ある時は拾い上げて見つめ込まれたり、たいていの場合は、気が付かれることもない、しかし、確実に存在している。高密度の時間と、高密度の集中の中にいる都市生活者に



1993 古典的交信機器、伝声管

対して原点としてのコミュニケーションの意味をひとつのメタファーとして提示しようと思いました。具体的に作品を説明すると、不完全な形の伝声管（ラッパ状に開いた口と、その反対側は、ほかと繋がることなくただ開いたパイプ状の形）をオブジェとして、あるいはドアのノブにして、また雨トイとしてなど、都市の中にちりばめることを意図しました。都市の中にちりばめられた不完全な伝声管による幻のネットワークは、唯一そのフォルムが記号として関係性を暗示させるものとなります。

豊かな自然の中の公園と、都市の中とで、環境が違うことによって異なった方法論によって組み立てられたそれぞれの伝声管は、人々に対し表現として同じ意味を持つ子とが出来るのではないかと思います。

実際に設置されたファーレ立川でのこの作品は、設置するという実務的な過程の中で、様々な条件によってペDESTリアンデッキ上の1ヶ所に6本かためて設置されるという結果になってしまいました。このことは、コンセプトが半分欠落したことを意味し、残念であり次への課題として持ち越さざるを得ないですが、とにかく実際に公共の場所に設置するという事が私にとって重要なわけです。そして、これからの活動によって、このことは補完しうるものと考えています。